

ジャグパル



2008年7月1日 第41号



インタビュー

【サーカス学校の生徒さんたち】

今回は群馬県みどり市にある「沢入国際サーカス学校」に向向いて、そこで学ぶ生徒さんたちに話を伺ってきました。

来る7月21日(月・祝)には、本校による初の東京公演を控え、何かと落ち着かない時ですが、九名のパフォーマーの卵たちが笑顔で練習場である体育館で迎えてくれました。

私を取り囲むように、マットの上に座りながらのワイワイガヤガヤと、笑い声の絶えない文字通りの座談会に、このおっさん(私)は楽しいひとときを過ごすと共に、エネルギーをもらうことができました。



インタビューに付き合ってくれた生徒さんたち

さてサーカス学校については、過去ジャグパルでも度々触れてきましたが、おさらいをさせていただきます。

本校は、サーカスアーティストやクラウン等を目指す人々の訓練の場として、廃校となった沢入小学校の体育館(写真参照)を練習場として、2001年9月に群馬県みどり市東町(旧 勢多郡東村)に開校しました。

また本校は「NPO法人国際サーカス村協会」が創立し、運営にあたっており、理事長である西田敬一氏が学校長を兼務しています。

なお国際サーカス村協会自体は、1997年9月に設立され、同年には「サーカス資料館(写真参照)」が落成されています。資料館にはサーカス関連の書籍、あるいはビデオなどのメディアが豊富に所蔵され、宿泊設備も整っているため、時折サーカスの研究を目的に、泊まり込での執筆作業をされる方もいらっしゃいます。



沢入国際サーカス学校
練習場(体育館) 外観
<みどり市東町沢入>



サーカス資料館
外観
<みどり市東町神戸>



サーカス資料館 内部

さあ話を元に戻しましょう。現在サーカス学校の生徒数は、二十名(うち女性六名)ですが、今回私のお相手をしてくれたのは以下の九名の皆さんです。(敬称略、座談会で座っていた順)

柏木清香、鶴 貞浩、渡邊 翼、榮原麻衣、齋藤英祐、湯本康道、宮川一馬、太田将人、高村 篤



柏木清香(4年生)

存在感ある暖かなクラウンを目指して勉強中。大丈夫、その笑顔は十分目立ってます。



鶴 貞浩(3年生)



渡邊 翼(2年生)

スタッフジャグリングを練習中。明るく楽しく元気に学校生活を満喫しているようです。



榮原麻衣(2年生)

綱渡りとディアボロを練習中。カノジョ欲し~いい!と、現在募集中。

練習(フラフープと倒立)とディズニーが大好き。独特の雰囲気でものを包み込む不思議少女。



齋藤英祐(研究生)

(卒業生だが研究生として在校)

さすが先輩(古株?)、仕切って一番良く語ってくれました。



湯本康道(1年生)

チャイニーズボールを練習中。練習熱心で真面目な学生というのが皆の一致した評価。ホント?



宮川一馬(4年生)

ベルト(ストラップ)を練習中。落ち着いた穏やかな喋りの中にも闘志を感じます。



太田将人(1年生)

基礎練習中。一言一言ドスがきいているけど、時折放つとぼけた発言に全員ズッコケ。



高村 篤(研究生)

(卒業生だが研究生として在校)

こちらも古株でよく喋る。もうすぐウクライナの彼女が来日するのでルンルン気分

入校したきっかけは?

まずはこの学校に入るきっかけを聞きましたが、皆が皆、何が何でもパフォーマーになることを目指して入ってきている訳でもなく、『何となく・・・』という軽いノリ(?)の生徒さんもいて、これは意外でした。それとほぼ全員がネット検索に導かれてというのも今時を感じました。(齋藤さんはジャグパル37号で、高村さんは35号でインタビューしていますので、彼らのきっかけについてはそちらを参照して下さい。)

『(柏木) 高校生の時に、いろいろと悩んでうまくいなくて、自分の興味あることを片っ端からネットで検索していたら、たまたまこのサーカス学校を見つけて“へえ~っ、学校があるんだあ”と驚いて、サーカスにはもともと興味があったので、この学校を見学に来て入ることにしました。』

『(鶴) 高校生の時には将来体操の道に進みたいと思っていたんですが、点数付けされる“競技”よりも皆に見てもらおうようなことができないかを考えていたら、サーカスが思いついて、それでネットで検索してここを見つけたんです。』

『(渡邊) 静岡出身なので、地元で開催している大道芸ワールドカップを見て、特にディアボロに感化され、職業にできたらいいなあと思い、ここに来ました。』

『(榮原) ネットで検索して見つけて来ました。(だから何故サーカスを検索したの?という仲間からのツッコミに対して) なんとなく... ひらめき!?(全員コケる)』

『(湯本) 身体を鍛えるみたいなの... そんな感じですかね。はい。(これ又コケる)』

『(宮川) 中二の時にシルク・ド・ソレイユのキダムを見て感動して、あんなパフォーマーになりたいくてネットで検索してここを見つけた。』

『(太田) サーカスのチケットを買おうとネットを見ていたらたまたまこの学校が見つかり、身体を動かすことが好きだったこともあり入りました。』

学校生活は？

普段の学校生活のことを聞いてみたところ、月～金曜日は、9時に体育館に集合し、開校当初から来日されているナジェイジダ先生(ウクライナ)の指導を受けつつ、各自のメニューに従って17時近くまで練習して解散。それ以降自主的に残って練習したりするそうです。

土日は休校なので、体育館で自主練習をしたり、アルバイトをしたり、ドライブインで大道芸をしたり、都内でパフォーマンスの仕事をしたりと、各自個別に過ごしているとのこと。

住まいは学校周辺でアパート・借家住まいなどで、当然親元から離れての自炊生活なので、『料理も洗濯も好きになって上手くなった。(宮川)』とか『生活力が身についた。(太田)』など、頼もしい反応が返ってきます。

また住まいの周辺には、スーパーやましてやコンビニなども無く、買い出しは週に1～2回、車で30分ほどの町に皆でわぁ～と繰り出し、またそれが楽しいとのこと、夜はたまに何だかんだ理由をつけて皆で集まっての宴もあるようです。あっ、もちろん翌日の練習に差し支えるのもっばら休日に集まるそうですが、

『でもたまに平日にも…(匿名)』

ところで皆は仲が良いのか聞いてみると、一様な

『仲がとてもイイですよ。アットホームな感じだし。先輩後輩の隔たりもないし。(全員)』

との返答に

『えっ、そんな答えを期待していなかったのになぁ～(^-^)(私)』

『ええ～っ (^ ^)(全員爆笑)』

『安部さん、ドロドロ系がお好きですか？(柏木)』

『実は、よーく深く見てみるとドロドロしている部分があったりしますけれどね…(齋藤)』

『えーっ!(´ ˘ `)(全員非難)』

…こんな感じで本当に皆仲が良いみたいです。



先生の指導は？

ナジェイジダ先生についてどう思っているか、こっそりと聞いてみたところ、『先生の指導は厳しいけれど、恐いと思ったことは無いですよ。(湯本)』や『伸肘倒立をやりたくて、先生の言う通りにやって短期間で習得できた時は感動しました。(渡邊)』等々、一時話が盛り上がりました。

先生からの指導に対して時には疑問を持ち、時には葛藤しつつも、先生の言葉をしっかりと受け取り、練習するもしないも自分次第…パフォーマーで成功するもしないも、結局は全て自分自身が責任を負うことを自覚しつつ、皆日々黙々と自主的に練習に取り組んで、次のような言葉も聞かれました。

『自分の意志でやっていくという自主性が重んじられます。(高村)』

『入った頃はつきっきりで指導してくれたけれど最近はどうでもないので、逆に自主性に任されていると感じます。(宮川)』



将来の夢は？

将来の夢を一人一人に語ってもらいました。

『(柏木)クラウンとして活動していきたいです。保育園とかで親子連れで、特に子供たちが喜んで楽しんでくれるような、そういった所で活動したいと思っています。』

『(鶴)正直、今はサーカス界というものがよく分からないけれど、自分の芸で稼いでいきたい。職業としてやっていきたいです。』

『(渡邊)凄い人になりたい！自分は静岡でヨーヘン・シェルさんのディアボロを観て、あぁこんな人になりたいと思ったので、他の人が自分の芸を観て、その人が僕のようにになりたいと思ってもらえるようなパフォーマーになりたいです。』

『(榮原)今は毎日がとっても楽しいし、楽しければいいかな...好きなことをやって生きていきたい。』

『(齋藤)まずは今の作品を仕上げた日本国内でどんどん仕事をして、海外に出て評価されるようになりたい。ビッグになりたい。』

『(湯本)いろいろ覚えていきたい。で...将来はどこかに就職して土日に趣味として大道芸をやりたい。』

『(宮川)サーカスアーティストになりたい。入った当初に比べればいろいろな面で成長できたし、これからも足りない部分を勉強して、いろいろチャレンジしていきます。』

『(太田)とりあえずここで頑張る。ここを卒業してダメならダメで、あきらめて他の道を考える。』

『(高村)いろいろなことを経験して、自分なりにどんどん積み上がってきていると思うし、今後も技を極めていけるよう頑張ります。』

東京公演への意気込み

7月の東京公演『マールイ・サーカスの一日』(東京都児童会館)に向けて、一人一人の演目とショー全体の演出のために、ウクライナから演出家のアレクセイさんが既に来日して練習に加わっておられます。生徒さん全員が何らかの形で舞台に立つ、その日に向けて皆さんの意気込みをお聞きしました。

『(柏木)いつもの発表会とは違って、お客さんにはお金を払ってきて頂くので気合いを入れて頑張ります。親も来るようですし。』

『(鶴)自分で納得できる芸を見せられるよう頑張ります。友達も応援しに来てくれます。』

『(渡邊)頑張ります。全力でやります。』

『(榮原)ノーマスでいけるように。』

『(齋藤)新しい作品を舞台という最適な状況で見せられるので、今まで積み上げてきたものを見せて、さすが先輩だと言われるような演技をしたい。』

『(湯本)自分が楽しくやって、その気持ちがお客さんに伝わって楽しんで貰えればと思います。』

『(宮川)日々の練習の成果を見せます。』

『(太田)皆の足を引っ張らないようにします。』

『(高村)ウクライナから来る彼女(サーカスアーティスト)に見せても恥ずかしくないようなショーを見せたいです。』



おまけ

今回残念ながら座談会に加われなかった生徒さん(敬称略)を紹介しておきましょう。

【研究生】堀口晶子、上坂直之、西山馬来

【生徒】天野真志、末廣祥久、高橋七奈、田中健太、松本真理、岡田直人、小島拓也、目黒有沙

研究生の堀口晶子さんと上坂直之さんはユニット“Jaるーか”として都内で活動。生徒の田中健太さん、岡田直人さん、小島拓也さんの3名は L'Arc~en~Ciel のコンサートツアー(コンサートでスティルツのパフォーマンス)に同行中。その他の方々も地元で仕事など今回お会いできませんでした。

またここで併せて本校で勉強して、既にプロとして活躍中の方々を紹介します。

【CHEEKY!(チーキー)】アクロバットパフォーマー。<<http://www14.plala.or.jp/uni-nagisa/wl/>>

【香山啓さん】木下サーカス。(ジャグパル35号参照)

【クラウン・ベケ(福田寛秀さん)】クラウン。

【しゅうちょう】大道芸人。<<http://www.p-jam.net/shu/>>(ジャグパル28号参照)

【森田智博さん】ジャグラー。(ジャグパル27号参照)

【あさこ(石川麻子さん)】ハンドアクト。

【GEN(ジェン)】CHEEKY!(チーキー)とユニット「Tim Tam」を結成。<<http://www.hmc.jp/main/>>

【クラウン・トミー(工藤友美さん)】クラウン。

[安部 保範]



イベント情報

マールイ・サーカスの一日

月日:7月21日(月・祝)14時~

出演:沢入国際サーカス学校

会場:東京都児童会館

詳細:<http://www.circus-mura.net/>

電話:03-3403-0561

木下サーカス(千葉公演)

月日:6月7日(土)~8月27日(水)

休演:公式ホームページでチェック願います。

会場:千葉みなと駅東300m特設会場

詳細:<http://www.kinoshita-circus.co.jp/>

キグレ New サーカス(秋田公演)

月日:7月19日(土)~9月15日(月)

休演:公式ホームページでチェック願います。

会場:秋田市新屋町割 旧秋田空港跡地

詳細:<http://www.kigure-circus.com/>

ポップサーカス(富山公演)

月日:7月19日(土)~8月31日(日)

休演:公式ホームページでチェック願います。

会場:太閤山ランド東隣特設大テント会場

詳細:<http://www.pop-circus.co.jp/>

ピエロマイムファンタジー

月日:7月25日(金)14時~

出演:汎マイム工房

場所:東京都児童会館

詳細:http://www.hanmime.com/index_pac.html

大道芸が舞台にやって来た! トランク vol.2

月日:7月26日(土)14時~19時~

場所:江東区文化センター

詳細:<http://www.nidyumaru.com/trunk/>



ちなみに「マールイ」とはロシア語で「小さい」という意味です。

プレジャーBのコメディクラウンサーカス

月日:8月9日(土)14時~

出演:プレジャーB

場所:東京都児童会館

詳細:<http://www.pleasure-p.co.jp>

体風の芽 フィジカルアートフェスティバル

月日:9月5日(金)19時~ / 6日(土)19時~

/7日(日)15時~

場所:スタジオPAC

詳細:<http://typhoonnome.blog71.fc2.com>

あらい汎ワークショップ「身体の言葉」

/金井圭介ワークショップ「オブジェとダンス」

月日:8月18日(月)~8月22日(金)

場所:スタジオPAC

費用:20,000円(5日間)/定員20名

(対象者は現在活動している演技者)

申込み締切8月19日(土)まで。

電話:03-3993-9418

URL: <http://www.hanmime.com>



ドラリオン(4月5日/原宿ビッグトップ)

三回目。A席で観ましたが、柱がないし、どの角度からも演技がよく見えるように演出が工夫されているので、S席でなくても全然OK!ということに気づきました。えっと、他には…えっと、相変わらずのシルク・ド・ソレイユで、ラスベガス含めて彼らのショーは15回ほど観ていますが、今回も思いっきり楽しめました…が、ビジネス指南書「ブルー・オーシャン戦略(ランダムハウス講談社)」などでも取り上げられたように、戦略的なサーカス・ビジネスの破竹な勢いで、彼らのショーはサーカスのデファクト・スタンダードになりつつあるようです。

ちょっと待てよ、何か変だよ、と僕の心の中で何かが呟いています。サーカスにスタンダードなんか必要ないし、ましてやサーカスには無縁と思われる言葉が聞こえてきます。『制覇』。

シエナドリーム・プラス (4月10日/ヨコハマみなとみらいホール)

これはメッケモンでした! 1990年に結成されたプロのウインドオーケストラで、実に楽しくも濃厚で聴き応えのある演奏を披露。第二部では「世界音楽紀行」と称し、各国の珍しい民族楽器を紹介すると共に、民族衣装を着ての演奏で場内を盛り上げる演出もグーッ! また現在、佐渡裕さん(指揮者)とも活動中とのこと。

映画「つくない」(4月17日/横浜シネマリン)

広大な邸宅に住む姉妹。妹の嘘が姉と恋人である使用人の息子との未来を闇に葬ってしまう。年月を経て作家として成功した妹は老いて死を覚悟し、姉と恋人を題材にした小説を書き、少女時代に犯した罪を償おうとするが、その行為は償いになるのだろうか。ラストシーンで、小説家がTV番組のインタビューで語った言葉

“I gave them happiness.”…妹からの視線と恋人たちからの視線が交錯する形で物語は展開していくが、エンディングで明かされる恋人たちの悲惨な結末。彼らへの償いは本当にできたのだろうか。

ヨコハマ大道芸(4月19日/伊勢佐木会場)

[ミモザさん]好きだなあ、この人。機会があれば必ず観ます。ホンワカとした暖かみのある演技は、何度観ても微笑ましく、子供たちにも大うけ。が、侮ってはいけません。マジックの技術は一流。本番前に見せたくすぐりとしてのシガレットマジック(タバコ一本を使っての多彩な出現・消失現象)だけでも満足。

[李双玉・宋娟]変面はいつ観ても不思議ですねえ。こんなに近くから観ていてもあつけにとられます。しかしあんな火吹きは初めてだ。変面の演技の途中にマスクをしたまま、かつマントを着たまま、5回ほど連続して、一回あたり2秒ほどと長い時間火を吹くなんて。危ない危ない!

[羅乗松・羅欧]何も無い空間から金魚や鯉(?)を出しますが、和妻の「金魚釣り」の方が情緒があっていいな。その他のマジックに関しては、お客さんとのコミュニケーションが取りづらかったようで盛り上がり欠け、内容自体も特筆する事は何も無い演技でした。

[山本光洋]久しぶりに大道芸で、腹の底から大笑いしました。小ネタを次々と出して、操り人形のチャーリー山本や風船頭の美女(?)とのダンス等、そのシャープな身体の動きも冴え渡って、何より光洋さんが描く情景(世界)が観客にもはっきりと目に浮かんでいったことでしょう。

魔術師 Dr. レオン コンプリートライブ(4月19日/青山劇場)

2時間弱の舞台上で20ほどの演目。その他に出演した韓国TV番組の録画放映、ゲストマジシャンの演技、そしてお土産マジックと、数分に一つのマジックが披露されたわけです。多すぎます…。まるでテレビのマジック番組の録画撮りをスタジオで観ているような感じでした。テレビ用の構成と舞台用の構成とはコンセプトが同じであるはずがなく、私は舞台には、テレビでは決して味わえないようなドラマを、夢を求めます。

1989年にMr.マリックさんが“超魔術”でテレビに登場した時には、良くも悪くもいろいろな意味で驚きましたそして、その後Mr.マリックさんはそのキャラクターをブランドにまで昇華させました。Dr.レオンことSHさんもマジック界では重鎮で、特にクリエイターとしての才能をいかんなく発揮していますが、Dr.レオンとはどんなキャラクターで、そこからどんなマジックの世界を描こうとしているのか、今ひとつ見えません。SHさんは昔からテレビには度々出演されていますが、よくキャラクターが変化しています。“超魔力”なるものを演じたり、HIROと名乗ったり、天空の魔術師ヒロ(Dr.レオンの原形?白髪と黒いサングラス姿)だったり、マジックを見続けている者にとっては正直落ち着きません。

京劇「西遊記」&中国雑技 好(ハオ) (4月20日/逗子文化プラザ)

中国雑技(皿回し/水流星/槍廻し/ディアボロ/雙人アクロバット/一輪車の頂椀)と京劇「西遊記」が披露されました。あちゃちゃ、中国雑技であんな下手くそな「ディアボロ」は初めて見ましたが、同じ演者でも頂椀は普通に上手かった。また雙人アクロバットはなかなか見応えがありました。しかし京劇も何だかイマイチ。なんとすればこの「中国太陽芸術団」は団員間の上手い人と下手な人、同じ演者でも得意演目と不得意演目のレベル差がありすぎるようで、どうにもちぐはく。

が~まるちょば サイレントコメディ(4月20日/関内ホール)

1,100人収容のホールは満席！ヨコハマ大道芸の最終日ということもあるのですが、パントマイム公演でこれだけのお客さんが集まるとは正直驚きました。期待を裏切ることなく、腹を抱えての大笑いから、人間讃歌を象徴するような優しい笑いなど、いろいろな笑いを味わい、パントマイムの偉大な力を再認識すると共に、実に充実した時間を過ごすことができました。満席の観客の盛り上がりも異様ですらあった。

映画「今夜、列車は走る」(4月25日/渋谷ユーロスペース)

アルゼンチン映画。地方都市で鉄道の赤字路線が廃止されたために、職を失った5人の労働者の退職後の人生に焦点をあてた作品。自ら命を絶つ者、犯罪に手を染める者、違法の配送業に関わる者、いずれも光が見えない、出口のない破滅的な状況に向かう。それでも映画には家族愛や友情などがユーモアを交え描かれ、ラストシーンでは、その閉塞感を打ち破るが如く、希望感を醸し出した象徴的な事件が、彼らの子供たちによってなされ、観ている方も"出口"が見えた思いで救われます。

野毛大道芸(4月27日/野毛本通り,野毛坂,柳通り)

【Mr. YU さん】初見。朝一番の10:30という早さにも関わらず幾重もの人垣。場慣れしてお客さんの扱いが上手い、いかにも大道芸といった感じで、やんやの喝采。

【ハッピーゴリラさん】初見。いやはや、なんと強烈なキャラクターなんでしょう！バルーンを中心としたコミックショーで、特に踊りは愛嬌が溢れていて大うけ。

【風船太郎さん】初見。良く喋ること喋ること。バルーンを使ったマジックの多彩さには注目。ハッピーゴリラさんといえ、バルーンパフォーマンスも色とりどり、十人十色といろいろな方々が出てきて楽しくなってきました。

【梅ちゃん】初見。これまたなんとも楽しいパフォーマンス(3D紙芝居)ですが、演技よりも何よりも私、この「梅田和佐」さんという人物そのものに興味津々。

【KIKYO BROTHERS】ご存じの桔梗兄弟。15分のショーとして完成度が高いと思いました。音楽は一本で編集されていて、演技内容とシンクロしているし、ボール、クラブ、ディアボロの演技もベアという特色を存分にアピールしているし、見せ場の作り方もよく考えているし、見入ってしまいました。ブラボー！

【バルーンおやじさん】いつものとぼけた雰囲気(癒し系)でギャグを連発(おやじ系)しながらのパフォーマンス。付き合いは長いけれど、毎回超絶技巧を駆使した驚きの作品から、拍子抜けの脱力ズッコケ作品(ネタ)まで、守備範囲の広さはさすがで、いつもいつも感服。

【伊藤佑介さん】観るたびに演技がバージョンアップ&パワーアップしているところが凄い。本当に研究熱心で、ハードな練習をこなしただで、毎回全力の直球勝負には清々しさを感じます。

【紙麻呂さん】初見。Miser's Dream(コイン)、Star Gazer(輪ゴム)、Healed&Sealed Soda(缶コーラ)、Four Nightmares DX(ロープ)、Linking Ring(6本)、Floating Rose(浮遊)など、多種多様なマジックが次々と披露されます・・・でもそれは散漫とも言えるし、せっかくの独特の衣裳とメイクでの演技ですが、紙麻呂さんが描く世界が伝わってこなかったのが残念。ひとつのトリックに向き合って流すことなく、もっとじっくりと取り組んではどうだろうか。しかし開始前の準備の時に大勢の観客の目の前でジリを堂々とセットする度胸には驚き！

【CHIKIさん】大道芸バージョンは初めて観ましたが、ユーモアある軽~いお喋りの割には凄いこと演っているから、そのアンバランスさに観客の皆さんはスゲースゲースの大喝采。

映画「譜めくりの女」(4月30日/シネスイッチ銀座)

少女メラニーのピアニストへの夢は、音楽院の入学試験時の審査員アリアーヌが取った無神経な態度に激しく動揺し、打ち破かれてしまう。十数年後メラニーはアリアーヌに再会し、彼女の演奏会の成功の鍵を握る「譜めくり」として信頼を得るが、メラニーの復讐が密かに始まる。「譜めくり」が演奏の善し悪しに大きく影響するとは意外なことでしたが、この復讐劇、どこまでが計算されての行動なのか謎が多く、セリフが極端に抑えられているせいもあり悩みどころが多かった。とは言うものの、女性二人の心情をきめ細かく情感豊かに描き、かつ物語はスリリングに展開され、なかなかの見応えでした。

映画「ゼア・ウィル・ビー・ブラッド」(5月4日/日比谷シャンテ・シネ1)

石油採掘によってアメリカン・ドリームをかなえた男の利権争いと血塗られた半生を描いた社会派ドラマ。音楽は映像とストーリーにマッチして、劇場を殺伐とした不条理感で覆い尽くして印象深かった。でも映画の印象はそんだけ。あんまし好きくない。肌にあわん。

日テレ ART DAIDOGEI(5月6日/汐留日本テレビ)

【Koji Koji Moheji さん】バグパイプ演奏の後にディアボロで高度なトリックを披露、見事三つのディアボロを決めて再びバグパイプ演奏。シンプルな構成ながら、素晴らしい楽器演奏とジャグリングで密度は濃くあつという間の30分でした。一粒で二度美味しい！上品な語り口にも好感度

生誕100年 東山魁夷展(5月9日/東京国立近代美術館)

これまでの東山画伯の回顧展で最大規模の本制作約100点、スケッチ・習作約50点が展示され、作品を時系列で観ると作風の変化が分かって面白い。さらに得したのは本美術館が所蔵している藤田嗣治さんの作品が常設展示されていて初めて目にできたこと。戦争画の「アッツ島の玉砕」とご存じ"乳白色の肌"で描かれた「五人の裸婦」…えっ同じ画家が描いたものなの！！唖然。

青少年のためのチャリティコンサート(5月10日/藤沢市民会館小ホール)

湘南地区を中心に活動されている、吹奏楽団とフラダンスグループ(田村淳子さんの教室の生徒さんたち)の競演。いやいやフラダンスというものをたっぷり堪能させて頂きました。フラダンスの身振り手振りの一つ一つには意味があり、言葉や心を表現した古人の伝統と文化を受け継いだ踊りという認識はあったのですが、何かを表現しているんだろうなぁと想像を巡らせながら、心地よい音楽に癒されていました。

地区センターまつり(5月18日/横浜市栄区本郷地区センター)

栄区在住のシニア世代のマジック愛好会の発表会。長い歴史をもつ横浜マジカルグループ(Y.M.G)の植木将一さんが講師として指導されているだけあって、安易に売りネタに頼らず、ロープやシルクという基本的な素材を活かして如何に流麗に美しく見せるか、演技の中にそんな指導方針が感じられました。特にシルクマジックは、そのままステージに持っていっても通用するような無駄のないリレーティンに仕上がっていました。が、同時にシニア世代の演者の方々の極度の緊張感も伝わってきちゃいました。お疲れさまでした。

上野鈴本演芸場・下席(5月23日/上野鈴本演芸場)

寄席はいいねえ～。弁当食って、飲み物飲んで、目の前では面白可笑しい芸が次から次へと繰り出され、幸せなマツリとした時間が過ぎていきます。特に常設寄席はいい！前座 中トリ 仲入り 食い付き(かぶりつき) 膝がわり トリという、人間である観客の心身状態にあわせて、各演者の役割を明確にした構成はホントよく考えられています。

太神楽曲芸は、翁家和楽社中の皆さん(和楽、小楽、和助)で、相変わらずのとぼけた和楽さんの後見ぶりにはニヤリニヤリ。太夫と後見という演じ方もよく考えられたシステムです。まさしく寄席は先人の知恵が結集された素晴らしい場所です。

Lilis Junk Live(5月24日/横浜市栄区民文化センター リリス)

【桃猫】洗美(ひろみ)さんをボーカルとするユニット「桃猫」のライブ演奏。のびやかで力強さの中にもしっとりとした優しさを感じさせる歌声は気に入りました。全曲洗美さんの作詞作曲によるそうですが、エスニック的な雰囲気も漂う心地よい音楽でした。プロを目指して活動中とのことで頑張ってください。

ダメじゃん小出の黒く塗り！ Vol.5(5月30日/横浜にぎわい座・のげシャーレ)

久々にダメじゃん小出さんのソロライブを楽しみました。飛躍的に"喋り"が上手くなり、余分な力が抜けた喋りとか、特に間の取り方に積み重ねた経験そのものが上手く出てきていると感じました。個人的には落語(寄席)の影響を全編を通して感じ、落語ファンの私にとっては新たなダメじゃん小出を発見したようで面白かった。

時事ネタを独自の視点からひねりをきかしての毒舌は相変わらずですが、オチが(以前ほど)ひねり過ぎずにストーンとストレートに腹に落ちてくるところが心地よく、また小出さんの最近の活動での出来事を軽いノリで面白可笑しく話す様子は、漫談というより落語の「マクラ」のようでした。

tomoko 08 星をみあげてコンサート(5月31日/横浜市栄区民文化センター リリス)

tomokoさんは確固たる独自の世界観を持って、それは花鳥風月の中で生きる人間の喜怒哀楽を優しい目線で歌い上げているような、とても居心地の良い空間です。ステージではいつもニコニコして穏やかな語り口で観客を和ませてくれる素敵な女性。臼井麻意子さんのビブラフォンはtomokoさんの歌声に見事に溶け込んで素晴らしい演奏を聴かせてくれ、あのバークリー音楽大学を卒業されているということで、時折見せるJAZZYな演奏はスリリングでした。

横浜ぬらひま団吹奏楽演奏会(6月1日/横浜市栄公会堂)

職場の同僚が属している楽団。面白いことにあの「さかなクン」も楽団員でコントラバスクラリネットを演奏しています。創立25周年ということでメンバーのイキもあって、かつ選曲も素晴らしいことから、特にハーモニーの美しさが印象に残りました。ちなみに同僚の話ですと、演奏会終了後ロビーに現れたあの帽子をかぶったさかなクンを取り囲んでのわか撮影会で大変だったようです。

寺井尚子 "小さな花"ツアー2008(6月1日/関内ホール)

す、凄い...相変わらずの全力疾走！休憩15分を挟んでの、お喋りは曲目と共演者紹介以外無しの、全てのエネルギーを費やしての密度の濃い12時間。エンディングに叫んだ『このエネルギーで走り続けますっ！』という言葉が演奏にかける彼女の姿勢を物語っています。恐らく若い頃にはジャズ喫茶通いをしたであろう、私のようなジャズファンの中老年層が目立っていたように思えますが、彼女の演奏はいわゆるモダンジャズに浸ったおやじ連中にとってもたまらないです。血湧き肉躍るといった感じ。彼女の演奏会でいつも味わうこと...演奏中の高揚感、聴き終わった後の充実感と一抹の淋しさ。まさにエリック・ドルフィーが遺した言葉そのもの。

"When you hear music, after it's over, it's gone in the air. You can never capture it again."

(音楽を聴き終えた後、それは宙に消えてしまい、二度と捕まえることはできない)

シャーマン舞踊団"出会い"(6月4日/昭和音楽大学 テアトロ・ジョリオ・ショウワ)

最近のトルコの経済成長はめざましく、今回二国間の貿易とビジネス関係をより強固にし発展させるべくギョル大統領が来日し、この舞台公演はそのイベントのひとつとして開催されたものです。会場には大統領も来られ、多くの観客(三分の一くらいはトルコ人か?)から盛大な拍手で迎えられていました。さすが大統領が連れてきただけあって超一流の公演内容で存分に楽しむことが出来ました。総勢40人の舞踊団が繰り広げる、アナトリアの伝統的な舞踊とモダンダンスとの"出会い(融合)"をテーマにした躍動感溢れる舞踊の数々には拍手喝采！帰りには何とお土産(書籍)まで頂きました。書籍は2冊。「悲劇の軍艦エルトゥールル号」と「テヘラン脱出-世紀の救出作戦-」。

トルコ(土)は仕事で数回出張したことがありチョーお気に入りの国です。1890年に和歌山県串本沖で起きたエルトゥールル号遭難時の住民による必死の救命活動は、日本とトルコの友好関係の起点としてトルコの小学校教科書にも載り、それがゆえトルコ国民には親日家が多いとさえ言われています。また1985年のイラン・イラク戦争時のトルコ政府・トルコ航空による日本人救助活動、1999年のトルコ大地震時の救出された日本人による援助キャンペーン開催など、日土の友好関係を象徴する話は多くあります。そうなんですよねえ...こういった民間レベルの支援活動をもっと大事にして育てていかないと、世界平和を実現するというお題目の下、特定国を武力で攻撃し、援助と言ってはお金だけばらまいても、国家間の真の友好関係樹立にはほど遠いです...なんてことも感じた一夜でした。

銀座 9Ave. パントマイムウィーク3(6月13日/MAKOTOシアター銀座)

【山本光洋,細川紘末】光洋さんと細川さんのキャラクタのぶつかり合いが、相乗効果として上手く出ている公演だったと思います。ソロ演技では、光洋さんからは現実の生活の一断面を切り取ったの滑稽さや哀しさが表現され、細川さんからは内なるファンタジーの世界を見せられ、対照的でした。一方お二人によるアンサンブルは、息もピツパツで、絶対あり得ないことだけれど、ひょっとしてあるかもと錯覚させてしまうような、そんな異次元での男女の出会いや駆け引きを、見事に笑いの中で演じきっていて、ありゃ面白かった。

鍋木清方展 生誕130年記念(6月14/鍋木清方記念美術館)

鍋木清方と言えば美人画家として上村松園、伊東深水と共に三大巨匠として有名ですが、画伯も自身のことを『専ら市民の画境に遊ぶ』と仰ったように、東京下町での庶民の慎ましやかな生活を描いた風俗画は、見る者の心をその時代に引き連れて行ってくれるようで、見入ってしまいました。

しかし絵画が醸したこの独特の「空気感」は何なんでしょう。パフォーマンスのライブは観客の反応が会場の雰囲気左右しますが、絵画が一方的に解き放っているこの「空気感」は何なんだろう。不思議。

なお鍋木清方記念美術館は、画伯の終焉の地、鎌倉の旧居後に建てられたもので、ごんまりとしてゆったりと落ち着けます。鎌倉散策の折には是非どうぞ。

松永貴志 Japan Tour 2008(6月20日/横浜市栄区民文化センター)

わずか17歳でプロデビューし、現在22歳での5枚目のアルバム発表にあわせたツアーの初日。数々の賞を受賞し、天才という名をほしいままにした彼は、ピアノ教室も音楽学校も行かずに独学でピアノを習得したというから驚き！喋っていればただのやんちゃな若者といった感じですが、ひとたび鍵盤に向かえばジャンルを問わず、スタイルも変幻自在のジャズピアニストに変貌。演奏する行為自体がメチャクチャ楽しいんだろうな、と真っ直ぐに心の内が届いてきます。TV番組「情熱大陸」で取り上げられ、その中での彼の言葉。『(何事にもチャレンジする時に)大切なことはできるという思い込み。』そして『僕には型はいらない、その先に可能性があるから。』カッコイイ！！こんなこと一生に一度は言ってみたいものですねえ。

堀の外のジャグリング 第参回公演(6月28日/深川江戸資料館小劇場)

「一つの道具を用いて、10分以上の演技をする」という課題のもとのパフォーマンス。単一の道具では単調になりがちですが、かえって制限することによって、各々が工夫して斬新な発想による展開が期待できるのかも。

【SOBUKI】道具もどんどん進化しているんですね。暗転の中での、発光する"ディアボロスティック"による舞台ならではの幻想的な演技。後半は大道芸チックに喋りながらの演技でしたが、ストリートの構成をそのまま持ってきたような感じでしたが...

【サリバン & NoB】ギタリストNoBさんの演奏をバックにクラブの演技。サリバンさんは舞台映えがして大きく見えます。演技では扱うクラブの本数を徐々に増やしていきますが、1本あるいは2本の時の女性らしく優しく流れるような演技は、優雅と言うより、むしろサリバンさんらしい快活さを感じさせる表現で好感が持てました。3本ではアップテンポになり、これでもかという位の数のトリックを次々と披露しますが、ドロップが多くサリバンさん自身リズムを崩したように見えました。トリックを"見せる"のは二の次として、もっと安定したトリックに絞り込んで、表現を"魅せる"ようにしてはどうだろうか。そんな意味でも、続く4本はともかく、5本の演技は余分に感じました。(10分以上という制限もあることから構成は難しいでしょうか)

【小林智裕さん】舞台向けの構成としてはよく練られていると感心しました。あまりアーティスティックに傾倒することなく、ほどよい加減でマニアのみならずとも楽しめますが、一方観客に始終緊張を強めているような感じも受け、もっと随所に余裕を与えられるともっとイイかな。

【ながめくらしつ】アンニュイな雰囲気や青年三人(目黒陽介さん、松田昇さん、池部淳さん)が、ホテルの一室とも倉庫内部ともとれるような暗めの閉空間で、光と音楽が交錯する中、何かを物語っているかのように様々なボールジャグリングを披露します。さすがと唸らせる高度なテクニックでハラハラもさせられますが、時折のユーモラスな演技には頬が緩みます。小春さんのアコーディオンは演技に溶け込んでいてこれまた素晴らしい。

【on-sa】「一つの道具を用いて・・・」という制限に、さらに制限をかけてしまうという意欲的な作品。全身鏡を想像させるフレームに向かい合って、しんのすけさんが虚像であるchieさんと、デビルスティックでハーモニックな演技からバトルまで、二人の状況はどうなっているんだろうと想像をかきたてられるような演技が続きます。移動させた全身鏡の位置を常に意識しながら、二人は演技をしなければならぬという新たな制限は、観る者の視点が定まって効果的かもしれません。コメディ部分は、もっとシンプルに大袈裟に分かりやすくすれば、もっともっと楽しく愉快的な作品に仕上がると思いました。

【見世物小屋パフォーマンス・舞丸】まいった！世の中いろんな方がおられます…。本公演の一番の功労者ではないでしょうか。この方のこともう少しリサーチせねば。

英国王立音楽院 & ギルドホール音楽院 コンサート(6月29日/鎌倉芸術館)

英国ロンドンの名門音楽院「英国王立音楽院」と「ギルドホール音楽院」に在籍し次世代を担う学生たちによる日本初の公式ジョイントコンサート。ウォルトンの「弦楽四重奏イ短調」はパンフレットで『内省的な第1楽章、せわしなく焦燥感に満ちた第2楽章、透明で抒情的な第3楽章、異常な緊張感を持つ第4楽章(青木雅樹)』と評され、聴いていると胃からのど元まで身体の中が熱を帯び、まるで食道に熱棒を突っ込まれたような、そんな不思議な感覚に襲われました。

[安部 保範]

編集後記

ジャグパルは1998年9月に第一号を発行したので、もうかれこれ十年が経とうとしています。(当初は「ジャグラーズ通信」と名乗っていました)これだけ続いたのは、マメそうに見えて、実は案外いい加減でテキトーな私の性格によるところもあるのかもしれませんが、やはりなんと言ってもたくさんの方々のご協力のおかげです。みなさん、ありがとう！これからもよろしゅー。

この十年間で明らかに変わったことと言えば、パフォーマンスの見方の軸足が「技」から「人間」に変化したこと。人間観ずしてパフォーマンスの面白さは語れません。

ジャグパルは私という一個人が野次馬根性丸出しで、単なる趣味として発行して、特定の企業、団体あるいはパフォーマー個人に関係しているものではありません・・・でも今回は思いっきり「サーカス学校」の応援をさせて頂きました。夢ある子供たちとお話するのは楽しい。みんなには己の納得いく道を歩んで欲しい。

編集発行人: 安部保範(神奈川県横浜市栄区 在住)

Webサイト: JugPal <<http://www.chansuke.net/jugpal/>>

見世物広場 <<http://www.chansuke.net/>>

E-mail: misc@chansuke.net